

87企画—9

87 SUMMER 沖縄——比嘉 豊光 写真展——

10月6日(火)—11月1日(日) (月曜休廊)

GALLERY TAKUMI



写真の現在 比嘉豊光の軌跡

翁長 直樹

写真は明らかに絵画のコードを引きついでが、機械を通した目とすることで、人間の眼の主観性を破壊する可能性を秘めて、それが「コードのないメッセージ」(バルト)などと言われたのである。しかし人間の眼は絶えず周りの世界を分節し、コード化するもので、写真さえも例外ではない。一度提出された写真のメッセージは、何度となくくり返されることによって万人の共通のイメージとして意味を持ち、見事にステロタイプ化したりする。写真家は常に飼いなされた人々の視線を裏切り続けねばならない。そのような新たな視覚の提供者という意味では画家も同様であるが、写真家の特性は人間化された視線を破壊し、けっして人間に再帰しない像を提供できるということである。

ベンヤミンは写真の出現(大量複製)によるアウラの消失を語ったが、それは今日の「写真の時代」を予言してもいた。写真のそもそもの出現は19世紀ブルジョワジーの欲望と密接に結びついていた。当時のブルジョワジーが今まで特権者のものだった肖像を気軽に手に入れるようになったのである。以来大衆の登場により、ますます拍車をかけられ今日の写真なしでは生活できない時代となった。大量の写真の出現により、写真家の匿名の時代となったのである。

比嘉豊光はおそらく匿名の時代の写真家を意識しつつ撮り続ける写真家の一人であろう。

60年代末の時代のうねりを体で感じつつ学生運動やデモなど、社会の激動を撮り続けていた比嘉は、70年代に入り、日本中を揺がせた社会運動の停滞と共に、被写体をキャベツやキビ畑など、日常の

何でもない風景を撮り始める。そのフラットななにげない写真からは坐折感やシラケが強く感じられた。しかし写真に対する情熱は冷めることなく、70年代半ばの写真家集団による自主ギャラリー「あーまん」の設立につながっていく。「あーまん」に参加した写真家は現在でも沖縄の写真家の中でも最も良質な部分であろう。

東松照明との交流もこの頃である。東松は現代日本の写真家の大御所的存在であるが、他の写真家と違う点は、汎アジアの視点を早くから持ち、やさしい眼差しで、沖縄、東南アジアを捉えたことである。東松は約一年半沖縄に滞在し、写真を撮ったのであるが、比嘉は東松との交友を通じ、多くのことを学び、また乗り越えようとして独自のものを模索しはじめる。東松の功罪は、沖縄の写真家が作品にならない日常的なものとして排除していたものを作品化したことと、その後の沖縄の写真家にとって様々な東松流の写真を生み出してくる根となったことである。つまり見たものしか見えなくなるという閉じた世界をもつくりはじめたわけである。

比嘉は早くからそのことに自覚的であり、コード化されステロタイプ化されつつある写真からいかにすり抜けつつ、日常を撮ることができるか、その急迫した課題に焦点を合わせたのが79年の東京新宿でのスライド上映会である。

12月の暗くて寒い東京で、沖縄のあつけらかんと明るい風景が延々と映し出されたが、当日参加した映像作家や批評家には不評であった。つまり「沖縄のきつい状況」を撮ってないというのが彼等の言い分であったようだ。しかしその言葉こそ見ることの制度を全く理解してない言辞に思えた。

今回8年ぶりの個展となるが、おそらく方法としてはそれほど変化はあるまい。ひとつの大きな物語の幻想の終焉から、神話や物語を信じない身ぶりで日常の光景のウラにある新たな隠された物語を語るのか、分裂したままゼロ地点からの比嘉自身の肉体的眼をそのままさらけ出してくるのか、この8年間の深化が問われるスライド上映会となろう。

■比嘉 豊光 プロフィール

		1977	「今日の写真展77」	神奈川県立県民ギャラリー	
		1978	「合同展」	東京新宿ギャラリー put	
1950	沖縄読谷村生	1979	沖縄大和「ぬじゅん展」	那覇市ダイナハ	
1974	琉球大学美術工芸科卒	1979	写真展「視覚の現在」	東京新宿文化センター	
1976	あーまん自主ギャラリー設立に参加	1979	スライド上映会	東京新宿文化センター	
1976-81	個展(毎年2回)	あーまんギャラリー	1980	ぬじゅん in 沖縄展	那覇市ダイナハ